

---

---

OBより一言

---

---

## 精神分析と共に歩んだ15年

毛塚満男

HERE AND NOW  
東大心療内科15周年記念誌

## 精神分析と共に歩んだ15年

毛塚満男

今夏、野村忍先生から15周年の記念会を11月に開きたいという報告を受け、もうそんなに過ったのかという感を禁じえませんでした。

私が石川先生にお会いしたのは、昭和48年1月11日であります。“過去”を記憶することは全く苦手の私にとってもこの日だけは一生忘れることのできない大切な日であります。私は昭和47年3月に金沢大学医学部を卒業したのですが、学部3年の頃から癌の研究に進むか外科医になるかで迷いに迷っていました。卒業が近づいてもはっきりと方向を定めることができないので、取りあえず学生時代から興味があった癌組織に親和性のあるアイソトープの研究をやることにし、母校に当時全国で初めて設立された核医学科に入局しました。

入局後一方で患者の診療に携わりもう一方で基礎的な研究を続けるうちに、この仕事を一生続けて満足できるのかという不安に強く襲われるようになりました。幸い友人も多く、“医者としての Identity”について毎晩遅くまで盃を酌み交わしながら語り合えたので、これが大きな支えになっていました。

入局后半年程たった頃、私の勤務する病棟に20才前後のバセドー病の女性が、その春にアイソトープ治療を受けたが一向に改善しないので再び入院してきました。彼女はめまいや弱視や全身の脱力感を執拗に訴えるのですが、検査しても異常はなく担当の医師は逃げまわっていました。やがて勤務交代があり、私が彼女の担当になりました。まず鑑別診断のため各種の検査を行ない婦人科や精神科にコンサルトしましたが、私の助けになるようなコメントは何も得られませんでした。途方に暮れていた時、私を救ってくれたのは同級生でした。彼は学生時代ノンセクト・ラジカルで医学だけでなく思想や哲学方面に興味のある男だったのですが、彼は彼女はいわゆる“心身症”でないかと言うのです。心身症については学生時代から年数回、九大から小川暢也先生が特別講義をして下さっていたのと、卒業試験にも出るというので勉強しており若干の知識はありました。

さっそく彼の上司であり心身症の研究に携っていた水島典明先生にコンサ